

デントンと荒木和一



(滋賀女子短期大学教授)

日比恵子

76年女子大学大学院文学研究科修士課程修了

石井研堂『増訂・明治事物起原』（春陽堂、一九二六）の「活動写真の始」の項で、米国より改良キネトスコープを大阪方面に始めて輸入した人として「荒木和一」という名が挙げられている。時を経て、昭和三十一年十二月一日の大阪日日新聞には、映画の日に因んでの取材に依って、「一八九六（明治二十九）年、ニューヨークでエジソンに会いヴァイタスコープ購入の交渉をすると共に機械操作をエジソンから直接教わった、中央公園でエジソンが自分を撮影してくれた、この機械を何でも生きたものを見るものだからと自分が〈活動写真機〉と名付けた、〈活動〉という熟語はここから始まった」ということなどを上機嫌で語る堺市浜寺諏訪森の隠居宅での荒木翁の姿がある。

荒木和一（明治五・二・三〜昭和三二・九・二〇）は学校は旧制第三高等学校の前身、第三高等中学校を最後に実学の道に

進んだ人であった。ここで級友であった後の同志社総長牧野虎次（『針の穴から』）は「当時の同級生には幣原喜重郎……荒木和一、等々後に名を為した人々が在って、多士済々の観があった」と述べている。向学心に燃える若き日の和一の姿があったに違いない。早くから英語習得を志していたようであるが、学校をでると欧米雜貨輸入商であった養父荒木安吉を助け、仕事のため渡米。当時は農商務省の嘱託として、隔年に欧米に渡っていたようである。一八九三（明治二十六）年、初めてサンフランシスコに上陸した時、公園にあった「Post-190 Bills」の掲示に大いに刺激され、このような字句を収集して広く利用できるように一冊の書として発刊すれば、日本人に大いに役立つであろうと思いつく。その後、欧米の風俗事情及び俗語を調査し、アメリカやカナダに行く度に自分の耳目に触れた語句を記録。

方言・俗語・商業用語・小兒用語・売声等々を整理してまとめあげる。これらは『英和俗語活法(The Standard Verbaist)』として一八九五(明治二十八)〜一九〇九(明治四十二)年の間に第一編〜第五編とそれぞれの改訂版が版を重ね、丸善書店より次々と出版されている。

養父安吉が大阪の島之内教会設立に深く関わっており、教会関係者として梅花女学校常置委員会の委員の一人であった。安吉の没(明治二十九年)後、明治三十年代には梅花女学校の理事として和一も名を連ねている。又、その英語力と実業界での経験からであろうか、一八九四(明治二十七年)年には梅花女学校で「外国商業通信」の授業を担当している。一九〇〇(明治三十三年)〜一九〇一(明治三十四)年には大阪高等商業学校でも嘱託で英語を教えている。島之内教会の仕事も安吉の後を継ぎ、信者として教会に永らく貢献している。明治三十三年からはモントリオールに本社を持つ加奈陀サン生命保険会社の代理店の経営を兼業。その後これに専念して同社関西支部長に就任。戦前大阪の実業界で活躍した人であった。

和一の英語力はまさしく実践により身についたもののようにである。自らの才能と努力により、公的英語通訳官をも務めた人であった。ご子息の荒木元秋氏はその著『鏡に映った戦争と平和』(近代文藝社、一九九二)の中で、一九二二(大正十一年)年英国皇太子ウィンザー公、及び一九三二(昭和七)年三月国際連盟リットン卿調査団の大阪訪問、同四月ハワイ太平洋貿易会議における通訳を代表的なものとして挙げておられる。

この荒木和一がどういふ経緯でいつ頃からミス・デントンと

の交遊を始めたのであろうか。元秋氏によれば、牧野虎次を通じてデントンと知り合い、再三訪問して英会話に興じていたとのことである。一方、幸(こう)夫人(旧姓・松田)が同志社女学校普通科の第十一回(明治二十七年)卒業生であり、デントンの秘蔵っ子であったことが元秋氏の両親の縁結びとなったようである。その後和一はデントンと家族ぐるみの交際を続け、幸夫人の亡くなった後もデントンとは親友といえる間柄であった。

私自身の興味は荒木和一『英和俗語活法』が日本の英語教育史に何らかの足跡を残していると評価できるのかどうかということにある。当初その著述は勿論、「荒木和一」という名前も私は全く知らなかったので、まず、どういう経歴の人なのかということから調べ始めた。そして、和一について何かの手掛りが得られるかもしれないと思ってデントン関係の書物を読んでいたら、恐らくは第二次世界大戦中と思われる時期に二人の間になんか手紙の遣り取りがあつて、デントンが和一に宛てた手紙をデントンの死後和一は同志社女子大学に寄贈した、ということを中心貢先生のご著書『デントン先生』(一九七五)によって知った。これは絶対女子大学史料室に保管されているはずだと思ひ問い合わせたところ、史料室と女子大学教授坂本清音先生の好意により、読ませていただくことができた。

手紙の内容は、物資の乏しくなってきた時代に不自由を忍んで生活するデントンを助けようと、頃合を見計らっては食料品や衣料品類を差し入れたと思われる和一に対するお礼から始まるものが多い。そして時間があれば来てほしいと和一の来訪を

願っている。当時和一は既に第一線を退き、悠々自適の生活を送り、書籍の収集を趣味としていたらしい。又、やはり趣味として英語だけでなくヨーロッパの言語にも興味を持ち、言語学の研究、特に語源の研究に没頭していた。同窓会の依頼により『会報』第六十四・六十五号に「趣味としての語源の研究(一)・(二)」を執筆しているし、通訳を務めるほど英語には堪能であったから、読書好きのデントンにとっては和一は貴重な話し相手であったと考えられる。書物に関する話題が最も多い。恐らく二人の間では本の貸借が頻繁に行なわれたのであろう。古本屋で本を探してほしい、買っておいてほしいといった依頼もかなり多い。和一に彼の『英和俗語活法』の増補出版やカナダでの生活についてを紹介する本の執筆を勧めたりしているものもあった。デントンにも意味不明の英語の俗語表現が、和一の所有する辞書によって理解できたこともあったようである。

今回判読した手紙の中で具体的に名前が挙がっていた荒木家の方々は和一・幸夫妻の長男重義氏、長女和子氏、三男元秋氏である。重義氏がデントンと直接関与することが最も多かったであろうか。父に代わってデントンハウスまで届け物をしたこともあったのであろう。若くして病死した重義氏を悼むデントンのことは愛情に満ちている。又、デントンが上野音楽学校に入学させたいと思っている同志社女学校卒業生の件でピアノストの和子氏に頼みたいことがあると、和一に書き送っている。更に、当時は満州で軍医として勤務中であった元秋氏のことを思い出して、元秋氏が非常に洗練された貴公子のようなマナーを身に付けた立派な紳士であるという称讃と共に、一刻も早い

帰任を待ち望む心情を書き綴っている。元秋氏は私信で「私もデントン先生を祖母のように感じていた」と述べておられるが、手紙はまさしくそのようなデントンとの非常に親しい家族ぐるみの交際関係を物語るものであった。

戦時中日本在留外国人の資産凍結令が出され、デントンも一時それに従わざるをえなかったようである。それが特別措置によって解かれた際、和一はその手続きに関わっていると思われるということが、一九五三(昭和二十八)年に出されたデントン追悼集に寄せた和一の文面から読み取れる。和一はその英語力によってかなりデントンを助けたことであろう。そして家族ぐるみの交際により、和一は精神面と物質面の両方においてデントンを支えていたと言えるであろう。

和一は更に追悼集の中で、デントンの影響を“bibliophilism”を楽しみとしていたと述べている。いわば蔵書道楽である。和の一のご遺族はデントンとの親交と牧野虎次と級友であったなどの関係で和一の蔵書の大部分を同志社大学図書館に寄贈された。その蔵書は膨大なもので、寄贈されたものは二万冊以上にも及ぶ。その中でも比較的まとまっていた英学関係のものについては一九七八(昭和五十三)年に図書館から目録が出版され、『荒木英学文庫』として別置保存、貴重書扱いとなっている。それ以外の蔵書は「荒木文庫」として収蔵されている。図書館で見せていただいた台帳から、蔵書は言語関係の辞典と百科事典が多いが、収集されたものはかなりの分野を網羅しているといえることがわかった。各分野の専門の立場から見れば資料として貴重なのではないかと思えるような文献も多く含まれている。

デントンから和一の手紙を読み、荒木文庫の書物を探したことから偶然発見した事柄の一つを紹介しておきたい。それは、現物が見当らなかったがF・B・クラップ『Mary Florence Denton and the Doshisha』（一九五五）が引用している手紙の中に書かれていた書物に端を発する。手紙の中で、デントンが和一に買って置いてほしいと頼んでいる本がある。W・E・グリフィスの『The Mikado's Empire（皇國）』（一八七六）である。勿論これは荒木文庫に含まれてゐる。この表紙を開いた

途端“With the regards of the author, in the 51st year of publication/Osaka, January 25, 1927”という文字と共にグリフィス夫妻の署名が目飛び込んできたのである。次の頁には「昭和二年一月二十五日の夜大阪ホテルに於いてグリフィス博士及同夫人を歓迎す。出席者各自署名す」とあり、十二名の日本人が署名している。どういう人たちの集まりであったのか、今のところ解答は持ち合わせていない。和一の名前はそこには見られないので、和一に関わりのある人々なのか否かは現在も調査中である。しかし、グリフィス関係の資料をかなり収蔵している福井大学附属図書館でグリフィスの日記のコピーを見せていただいたところ、大阪ホテルに三日前から滞在しているということと、当日レセプションがあったということは確認することができた。

そして、もう少し先を読み進んでいたらデントンという文字に行き当たったのである。一月三十一日にデントンの家で朝食をとり、女学校で約千五百人の女生徒に講演をしたということ、海老名総長一家に会ったということ、昼食を又デントンの家で

とったことなどが記されている。更に二月一日には同志社大学で約千人の男子学生に一時講演、海老名総長の部屋で休憩したことなどが書かれている。『同志社女学校期報』第五十二号には「講演一所感（一月三十一日）グリフィス博士」とごく簡単に記載されているだけであるが、グリフィスの記録はこれをグリフィス側から裏付けるものである。

更にグリフィス夫妻の署名の上には“Virginia A. Clarkson/ Mar. 1877”という署名もある。クラークソンはデントンよりやや早い時期に同志社女学校に来た宣教師であったということや坂本清音先生が教えて下さったことで、この書込みは新たな意味を持つものとなった。クラークソンはこの本を読んで、日本への思いを馳せたのであろうか。どういう経緯でこの本が和一の元に届いたのか。クラークソンからデントンへ、デントンから和一へと譲られていったものなのか。それをデントンは忘れてしまっていたのか。昭和二年当時和一の元にあったのだとしたら、大阪でのグリフィス夫妻歓迎会の時に署名をした人々と和一は関係があったのであろうか。一冊の本を巡って想像の世界が更に広がっていく。荒木文庫の膨大な蔵書には、デントンと和一の書物を通しての親交を物語る貴重な情報や手掛りがかなり秘められているのではないかと私には思えるのである。

（荒木元秋様は平成九年秋に永眠されました。享年八十五歳。和一に関する資料や情報を提供して下さいましたことに感謝致しますと共に、心より冥福をお祈り申し上げます。）

又、『島之内教会百年史』『百年史年表』を快くお貸し下さいました緒方正様にも厚く御礼申し上げます。）